

『とおい、おもいで』

兵庫県立明石高等学校 三年

松本 明日香

曾祖父たちの話を聞くのが好きだ。

私の曾祖父たちは揃って個性的な人ばかりで、同じ話をもう何べんも親にせがんで聞き続けているが、一向に退屈しない。

畑を耕しているのに野菜が嫌いで、無口で仙人のようだった曾祖父。

戦時中にブラジルでひと財産築いてきて、それらをすべて近所の人に配ってしまった曾祖父。

『甘道楽』という和菓子屋を営み、自動車や自転車を乗り回していた曾祖父。

海軍にいて、部下がいて、沈みゆく船から泳いで生還した曾祖父。

聞けば聞くほど面白い。私は会ったこともない曾祖父たちが大好きだった。

さて、最近になって、故あって日本軍について調べる機会があった。軍服のデザイン、階級について、兵舎での生活。そんなことをあれこれと調べているうちに、ふと海軍にいた曾祖父のことを思い出した。

海軍だった曾祖父は、父方の祖母の父だった。

そういえば、曾祖父には部下がいたはずだ。ということは、階級は伍長以上だろうか。一兵卒には部下はいないから、士官だったのには間違いない。

しかし詳しくは分からない。気になる。

あんまり気になるから、祖母の元まで聞きに行った。

「ねえ、ばあば。大きいおじいちゃんが海軍だったときの階級、分かる？」

「さあ……おじいちゃんが帰ってきたの、ばあばが三歳とか四歳とかの頃だから。よく憶えてはないけど、少尉とか大尉とか、そんなような人だったと思うよ」

「えっ、尉官だったの」

初耳である。

なおのこと気になる。

気になり過ぎて何も手につかなくなったから、夏休みの間に祖母に泣きついて、昔の写真をお願いしているのだという屋根裏を開けてもらった。

「軍服が写ってる写真さえあればいいの。一枚でもいいの。軍服を見たら分かるから、お願い」

そう言って開けてもらった真夏の屋根裏は、さながら電子レンジの中のようなだった。一歩足を踏み入れた瞬間に、つう、と汗が額を伝った。

「結婚式の写真なら、写ってたかも。おばあちゃんを着物で、おじいちゃんは白い軍服だったはず」

電気のスイッチを押してから少し間があつて、蛍光灯が白く光った。

窓の外でセミがうるさく鳴いていた。

「探したら出てくるかなあ」

言いながら祖母は、クローゼットの一つを開けた。

埃の臭いがつんと鼻を刺す。

見れば、古びた段ボール箱がいくつも入っていた。

「写真は全部この中。全部見る？」

「見る！」

写真は四、五箱分あったように思う。どれも丁寧にアルバムに収められていた。

若い頃の祖父母や、赤ん坊の頃の父や叔父がいた。

今のようなツルツルしている鮮やかな写真ではなく、表面のザラザラした、どこかくすんだ色味の写真ばかりで、私はまるで貴重なお宝を前にした冒険家のように、ドキドキしながらそれらに目を通した。

「このちっちゃいの、誰？」

「これ、お父さん」

「父さん？ えー、全然面影ないね」

「こっちは、じいじとばあばで旅行に行ったときの」

「わあ、ばあば可愛い！」

しばらくは祖母の思い出話に耳を傾けてはキャッキャと盛り上がっていたが、ようやくとハツとした。

本題、これじゃない。

しかし、見れども見れども、曾祖父はいない。

ひよつとして、曾祖父の写真なんて一枚も残っていないんじゃないかしら。

そう思ったとき、不意に祖母が「ああ」と声をあげた。

「いた、これ。これがおじいちゃん」

祖母の指した先を見れば、男性が一人写っていた。

親戚の結婚式の写真であるようだった。

笑顔の曾祖母もいたが、曾祖父は口を真一文字に結んでいた。どこか真面目そうで、誠実そうだった。

頭の中で、グレーのスーツを白い軍服に置き換えてみる。

軍服を着た若い曾祖父は、軍艦の帆先に立ち、写真の中の顔そのまま、じっと海の向こうを見つめていた。

「字が上手い人だったのよ」

祖母は写真を見つめたまま、懐かしそうに微笑んだ。

「会社内で、ほら、表彰とかあるでしょ。あれの表彰状、普通なら業者とかに頼んだらだろうけど、その会社ではおじいちゃんが書いてた」

「海軍辞めてから、普通の会社に就職したの？」

「そりゃあね、終戦したら、軍隊も解体されたから。おじいちゃんは、海軍で戦闘機のテストパイロットもしてた。だからエンジンに詳しくて、戦争が終わってからは航空機を作る会社に勤めてたんだよ」

そう言って祖母が挙げたのは、今もある有名な重工業メーカーだった。昔は航空機を作っていたそうだ。

目から鱗だった。

生まれて初めて、曾祖父の人となりに触れられたような気がした。

しかし、曾祖父がはつきりと写っていたのは、その結婚式を含む、数枚の写真しかなかった。それらに写る曾祖父はどれももう年老いていて、やっぱり真面目そうな顔をしていた。

結局、軍服の写真は一枚もなかった。聞けば、白黒の写真は祖母がすべて処分してしまったのだという。曾祖父の結婚式の写真も白黒だったというか

ら、きつと曾祖父の軍服の写真は、もう一枚も残っていないのだろう。

もつたないが、仕方ない。捨てたものは戻ってこない。

結局それ以上の搜索は諦めて、家に帰ることにした。曾祖父の話を詳しく聞けただけでも上々だろう。

祖母の家からの帰り道、上り坂を上がりきつてふと後ろを振り返ったら、海が広がっていた。

ボーウ、と、船の汽笛が遠くに聞こえる。夕日が海面に反射して、ちりめん織りの布みたいに見えるた。

曾祖父も、同じ海を見たのだろうか。

船の上で、夕日に目を細めながら、ちりめん織りの海を見たのだろうか。

そう考えたらなんだか感慨深くなって、私は海に背を向けて、早足に家に向かった。

後日、インターネットで調べてみたら、国会図書館に陸海軍の士官の名簿があった。うきうきしながら一晩かけて見てみたが、昭和十二年のものまでしもなく、曾祖父の名前はどこにもなかった。

名簿を見終えて一息つき、気付いたら空が白んでいた。

厚生労働省に問い合わせれば調べてもらえるという話も聞いたが、問い合わせる前にお盆が終わって、夏休みも終盤になってしまった。これから受験も控えているため、そちらにばかり熱意を向けてはられない。

曾祖父の階級は結局分からずじまいで終わったが、今となってはそれでもいいような気がする。

まったく知らなかった曾祖父のことを、少しでも知ることができただけでもよかった。

ただ、夏休み中盤のあの一日のことは、今でも鮮明に私の頭に残っている。

茹だるような夏の日、屋根裏部屋の蛍光灯、つんと鼻を刺す埃の臭い。

それらと一緒にくたになって脳裏に浮かぶのは、白い軍服の、出会ったことも見たこともない、若い曾祖父の姿だ。

私の中の曾祖父は、ちりめん織りの海の上で、今でも船に乗っている。